

血尿単独症例の運動処方に関する検討 — 多施設共同研究のための予備調査 —

長坂裕博¹⁾，与儀実之²⁾，田口宏和²⁾，藤原芳人²⁾

横浜市小児アレルギーセンター¹⁾，横浜市立大学小児科²⁾

1. 序言

酒井班においては血尿単独症例の運動処方を検討するにあたり，多施設で長期観察症例の予後と管理の関係について retrospective に検討を行うこととしたが，血尿症例の中には予後良好のために，長期観察されない者もかなりあるのではないかと考えられた。そこで，長期観察例が予後を考える上で血尿単独例を代表しうるかということを検討するために次の2点について予備調査を行った。

- A. 一般の血尿単独症例の男女比，年齢分布はどのようになっているか。
- B. 長期観察症例と脱落症例の間には，予後を考える上で違いがあるか。

以上の2点についての調査検討結果を報告する。

2. 対象・方法

多施設共同研究では表1に示す条件を満たす5年以上の長期観察例を対象として実施する予定のため，今回も同様の対象について次のような方法で検討を行った。

- A. 一般集団として，昭和61年度横浜市学校検尿三次精検受診者500名を選び，表1の条件を満たすものについて男女比，発見時年齢分布を検討した。
- B. 昭和56年に横浜市立大学病院小児科腎外来に通院していた者のうち，表1の条件を満たす者について，その後5年間の経過について追跡調査を行い通院継続例と中断例の比較検討を行った。

表 1

年 齢：発見時に6—15歳
発見動機：Chance hematuria
血 尿：初診時に1視野20個以上
蛋 白 尿：初診時に早朝尿で痕跡以下
または0.2 g/日以下
除外項目：尿路感染症，尿路結石

3. 成績

A. 対象者約39万人の昭和61年度横浜市学校検尿において三次精検を受診した初めの500名のうち表1の条件を満たしたのは166名であった。その男女比は1:1.6-8歳，9-11歳，12-15歳の発見時年齢別分布は1:1:2であった。

B. 昭和56年に通院していた者のうち，表1の条件に合致したのは47名で，その男女比は1:1であったが，発見時年齢別分布は1:1.5:1.5であった。このうち，現在も通院中の者が16名で，通院を中断しているものは31名であった。31名のうち，発見後5年以上の経過が判明したものは21名で，そのうちの10名については尿潜血反応の結果も得られた。通院中の者も含めて5年以上の経過が追えた37名の中で，腎機能の低下や高血圧を指摘されたものはいなかった。

通院状況別の男女比では，図1に示すように男性に中断例が多く，通院継続者の男女比は1:4であった。しかし，平均7年間の予後について図2のように男女別の比較をしてみると，男性に潜血不明者が多い影響があるものの正常化例の割合に明らかな差異は認められなかった。

图 1 通院状况别男女比

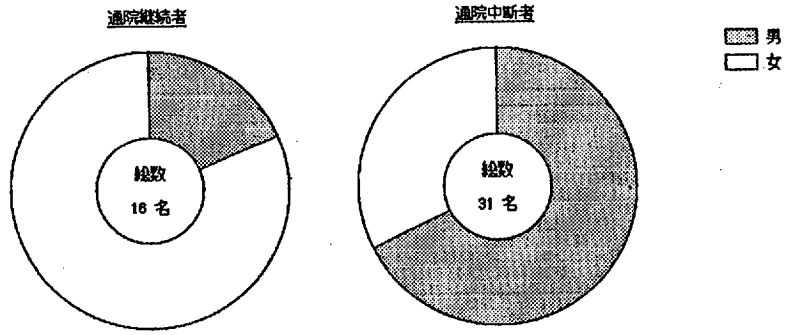


图 2 男女别予後

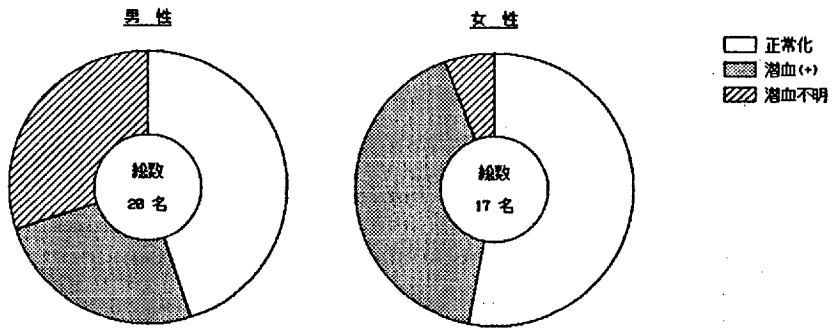


图 3 年龄别通院状况

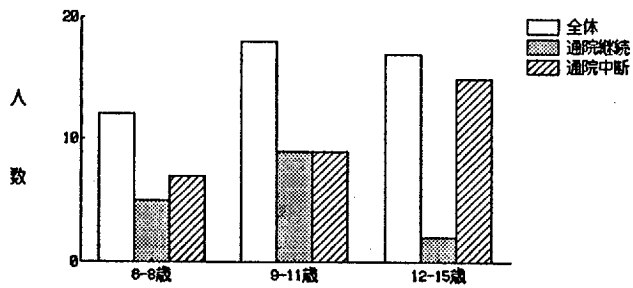


図 4 年 齡 別 予 後

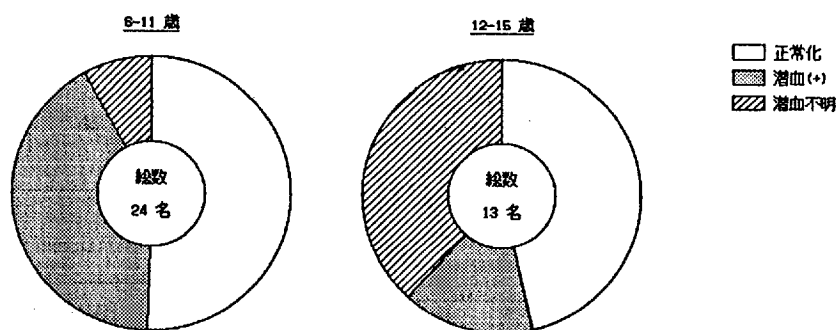


図 5 通院状況別初診時尿所見

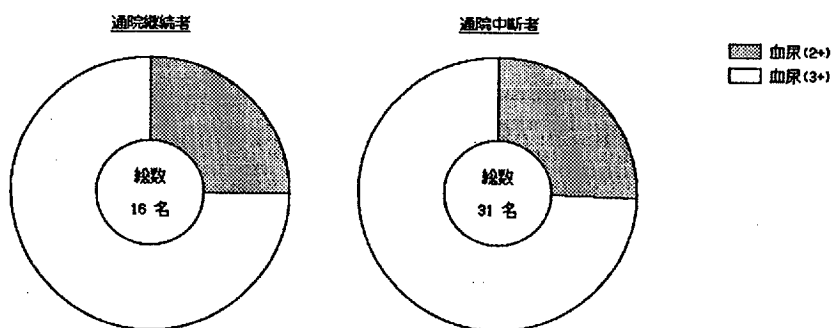
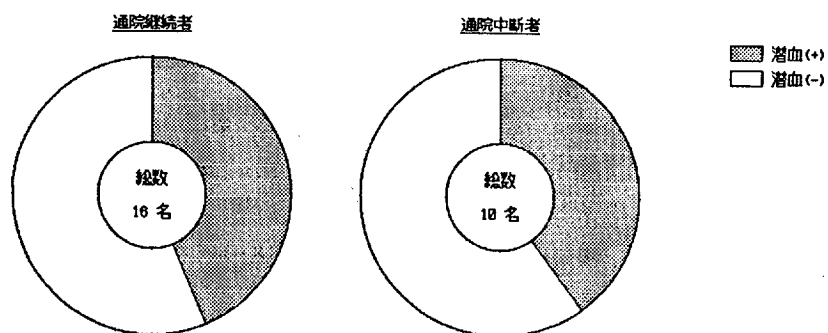


図 6 通院状況別予後



次に、発見時年齢別に通院状況を比較してみると、図3のように12-15歳では通院中断者が圧倒的に多かった。そこで、図4に示すような年齢別の予後を比較してみたが、男女別の比較と同じように12歳以上では潜血不明者が多いものの、正常化例の割合に大差はないように思われた。

以上の事をもとにして、通院継続者と中断者を直接比較してみた。まず、図5に示すように初診時の血尿の程度について比較してみると、両者の間には全く差が見られなかった。次に、図6に示すように現在の血尿の有無について比較してみると、これも両者の間には全く差が見られなかった。

4. 考察

今回の検討は追跡調査ということで転居者のデータが得られなかったこと、また、検尿は受けていても潜血反応の有無についてまでは本人が知らない場合があるなど完全なものとはならなかった。さらに、一施設における検討であるためその結果に偏りがあることも考えられた。

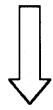
しかし、今回の検討では血尿症例のうち長期に通院を継続している者の性別や発見時年齢構成は、初診時のそれとは差異が認められたものの性別や発見時年齢の違いにより血尿の予後が左右されるということはないように思われた。そして、通院継続者と通院中断者の比較においても、初診時ならびに平均7年後の尿所見に大差はないものと考えられた。したがって、多施設共同研究において対象とする5年以上の経過観察例というのは、予後の点においては血尿症例の母集団と特に違いはないものと考えられたが、予後の検討を行う時には性別、発見時年齢については考慮しておく必要があり、対象者の男女比、発見時年齢分布についても今回得られた学校集団検尿での結果と比較検討しておくことが必要ではないかと思われた。

5. 結論

学校集団検尿において発見時の男女比は1:1、発見時年齢分布は6-8歳、9-11歳、12-15歳の比率が1:1:2と考えられた。

血尿症例のうち長期に通院を継続している者とそうでない者との間には、性別や発見時年齢分布に差異が見られたがその予後に関しては差が認められなかった。したがって、長期観察例の予後から血尿母集団の予後も推定し得るものと考えられた。

本研究を行うにあたり、御協力頂いた横浜市医師会学校医部会（会長 榊田 桂先生）の諸先生がたに深謝いたします。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



5. 結論

学校集団検尿において発見時の男女比は 1:1, 発見時年齢分布は 6-8 歳, 9-11 歳, 12-15 歳の比率が 1:1:2 と考えられた。

血尿症例のうち長期に通院を継続している者とそうでない者との間には, 性別や発見時年齢分布に差異が見られたがその予後に関しては差が認められなかった。したがって, 長期観察例の予後から血尿母集団の予後も推定し得るものと考えられた。